



学習院の考古学

学習院では、旧制時代に考古学の専任教員が在職したことではなく、現在も考古学を専攻する学科はありません。しかし、旧制学習院時代から歴史教育の教材として考古遺物が収集・保存され、卒業生から多数の考古学研究者を輩出します。

このように学習院学生達による遺跡や遺物の考古学的調査研究には長い歴史があります。学習院における考古学研究の歩みを概観しましょう。

●学習院出身の考古学者

①公爵大山巣元帥の次男、大山柏(1889～1969)は、明治28年(1895)学習院初等学科入学。その後、陸軍中央幼年学校、同41年に士官学校を卒業し、陸軍少尉に任官。早くから先史考古学への関心を持っていました。大正8年(1919)に濃尾地方で貝塚を発見し、翌年には沖縄県伊波貝塚を発掘調査して報告書を刊行しています。同12年戦史研究のためドイツへ留学しその傍ら考古学を学び、著名な考古学者であるH.シュミット、H.ブルイユらに師事しています。同14年帰国して自邸内に史前研究室を設立。昭和2年(1927)予備役となり、同4年史前学会を設立。『史前学雑誌』を刊行して、旧石器文化研究と関東地方貝塚の発掘による縄文土器編年研究、さらに縄文中期農耕論などの業績をあげています。



②旧越後高田藩主の子孫、榎原政職(1900～1922)は、明治39年(1906)学習院初等学科に入学。考古学に関心を持ち、のちに京都帝国大学考古学教室に属し、津雲貝塚・轟貝塚・蜆塚貝塚など考古学史上著名な発掘調査に参加しました。一方、自身でも縄文時代前期の標式遺跡である神奈川県諸磯遺跡を発掘して、遺物を分析紹介するなど精力的に活動しましたが同11年22歳の若さで死去しました。

③旧日向延岡藩主の子孫、内藤政恒(1907～1970)は、大正9年(1920)学習院中等学科に入学、在学中に旧三河挙母藩主の子孫、内藤政光子爵の養子となりました。昭和4年(1929)東北帝国大学に入学後、喜田貞吉博士らの指導を受けて、古代寺院跡から出土する古瓦に基く東北古代史研究

や古代瓦窯跡の発掘調査、古窯研究など歴史考古学を開発しました。同15年、義宮(常陸宮)正仁親王殿下の侍女官となつたため野外調査は中断しましたが、公務の傍ら古窯の研究を続けました。戦後、研究を再開、同32年に歴史考古学会を設立、機関誌『歴史考古』を発行して研究を発表、後輩を指導しました。

④子爵奥田直久の長男奥田直栄(1918～1988)は、昭和6年(1931)学習院初等科卒業後、旧制東京高等学校尋常科に入学、鈴木尚(後に東京大学教授)・神尾明正(後に千葉大学教授)らの先輩達の影響で考古学研究を開始しました。同12年父の赴任に従つて満州国に転居、同國大陸科学院ハルビン分院の研究員として顧郷屯遺跡など著名な旧石器時代遺跡を発掘調査して論文や報告を発表しました。その後根津美術館学芸員となり、また古代・中世遺跡から出土した陶磁器の研究や、中世城館跡の研究を行い、中世考古学の先駆者となりました。また、同30年から没するまで学習院大学輔仁会史学部の顧問を務めて学生を指導しました。



奥田直栄

●学習院主催の発掘調査

①世田谷区喜多見古墳群の発掘調査

東京都世田谷区の宮内省喜多見御料地は、学習院中等科の移転予定地とされていました。同地内に喜多見古墳群があるため、児玉幸多学習院教授は学習院史学会による発掘調査を計画し、帝室博物館(現東京国立博物館)嘱託の内藤政光子爵を指導者に迎え、昭和17年(1942)8月に発掘調査をしました。その結果、前方後円墳である7号墳(現砧中学校7号墳)主体部から乳文鏡・鉄斧・鉄刀・鉄鎌などの遺物が出土し、4世紀の築造と判明。同時に発掘した円墳の4号墳は5世紀の古墳と判明しました。内藤政光の執筆による報告書「武藏喜多見古墳発掘報告」(『学習院史学会報』復刊1号1949年)が出版されています。

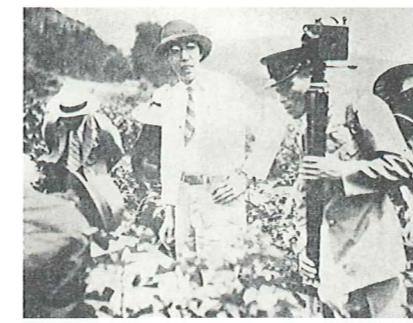
②学習院目白校地の発掘調査

学習院目白校地周辺では以前から石器時代の遺物が採集され、周知の遺跡とされてこれまで校舎建設の際に試掘調査が実施されていました。平成20年(2008)6～8月、学習院大学自然科学研究棟建設に伴い校地内ではじめて発掘調査が実施されました。関東ローム層から三枚の旧石器時代文化層が確認され、礫群や切出し形石器や削器・局部磨製石斧などの遺物が発見されました。

●学習院学生の考古学的調査

①伏見宮博英王の遺跡発掘

伏見宮博英王(1912～1943)は、学習院中等科在学中に考古学に強い関心を持ち、伊豆地方など東京近郊の遺跡を発掘調査。昭和4年(1929)8月に長野県諏訪湖周辺の縄文時代遺跡群を両角守一等の案内で発掘調査して回りました。博英王執筆の報告書はありません。しかし両角氏の報文が『史前学雑誌』第2卷第1号に、また発掘に参加した諏訪中学校地歴部の藤原寛人(後の作家新田次郎)、藤森栄一による想い出が藤森著『かもしかみち以後』(学生社 1967年)に掲載されています。その後、博英王は、同11年海軍少尉となり、同18年中国中部で戦死しました。



発掘中の伏見宮博英王(中央)

②千葉市荒屋敷貝塚の発掘体験

学習院中等科在学中であった皇太子継宮明仁親王殿下(今上陛下)は縄文時代貝塚の発掘体験を希望され、東宮傳育官山田康彦侍従の尽力で東京帝国大学文学部の三上次男(後に東京大学・青山学院大学教授)、理学部の酒詰仲男(後に同志社大学教授)の協議により縄文時代中期の千葉市荒屋敷貝塚(現在国史跡)の発掘調査が実施され、皇太子殿下と学習院中等科学生の希望者が参加した発掘体験が昭和21年(1946)10月に行なわれました。後に三上・酒詰は折に触れて学習院学生の考古学活動を指導しました。



荒屋敷貝塚での酒詰仲男の出土品説明

③中・高等科輔仁会史学部の発掘調査活動

荒屋敷貝塚発掘体験に参加し三上次男の知遇を得た高等科学生原輝彦は、同じく発掘体験に参加した中等科学生岡田茂弘(筆者)らを誘って三上の指導で昭和23年(1948)11月、鎌倉市稻村ヶ崎の横穴墓群等を発掘調査しました。更に翌年には児玉幸多教授の斡旋で東京大学考古学研究室在籍の学習院卒業生市川健二郎を指導者として、東京都国分寺

町恋ヶ窪遺跡を発掘調査し、敷石住居跡を発見。同年7月には品川区大井林町旧伊達伯爵邸内の前方後円墳を発掘しました。その後酒詰仲男の知遇を得た筆者は、その指導を受けて同級生の田実英一・堀田正祥(後の徳川美術館長徳川義宣)らと千葉県堀之内貝塚や稻原貝塚・田子台遺跡など南関東地方の多くの縄文時代遺跡を調査しました。また、同25年4月に田実・堀田らは世田谷区等々力御岳山古墳を発掘して、鉄製短甲などが出土しました。同27年には酒詰の指導で千葉県富津市大溝横穴墓群を、同29年にも千葉市菅田高田貝塚を発掘調査し、報告書を刊行しています。

④学習院大学輔仁会史学部の考古学活動

学習院大学の輔仁会史学部は、昭和30年(1955)頃から奥田直栄を顧問に迎えて、埼玉県江ヶ崎館跡や東京都多摩地方の中世城跡、鎌倉市のやぐら群などを相次いで発掘調査して、中世考古学の構築に貢献しました。その活動が契機となって大三輪龍彦(鶴見大学教授)・大橋康二(佐賀県立陶磁文化館長)・手塚直樹(青山学院大学教授)・大田幸博(熊本県立装飾古墳館長)・吉井宏(東北福祉大学教授)らの考古学研究者を輩出しました。平成元年(1989)以後は筆者を顧問として、千葉御茶屋御殿跡など徳川家康の鷹狩御殿跡の発掘調査や岩手県平泉遺跡群の発掘調査に参加しています。

⑤東宮御所内遺跡の試掘調査

昭和47年(1972)頃、学習院中等科に在学されていた皇太孫浩宮徳仁親王(現皇太子)殿下は、東宮御所庭園の一部から縄文土器の破片などが出土することに注目し、三上次男博士を調査担当者として試掘調査を実施しました。

⑥学習院大学考古学研究会の活動

昭和51年(1976)10月に中世考古学中心だった史学部の活動にあきたらぬ学生達が石器時代や海外などの考古学を学ぶため、学習院大学で非常勤講師をしていた関俊彦(立正大学教授)を指導者として、考古学研究会を結成しました。関は日本国内だけでなく広く海外の遺跡にも目を向けることを奨励し、同研究会出身者にはメキシコ考古学を専攻する大越翼(国立メキシコ自治大学)やベトナム考古学を専攻する菊池誠一(昭和女子大学)、韓国の石器時代を研究した廣瀬雄一(佐賀県教育庁吉野ヶ里遺跡担当主査)らがいます。

(国立歴史民俗博物館名誉教授 岡田茂弘)

*この「学習院の考古学」に関する展示は、Site2「ふれあい交流サロン」にて「学習院の発掘からみる考古学の歴史」展として行います。